

原著

子育て支援を見越した保育所における保護者との連携方法について

—H県における保育所の送迎方法についての調査とある市における送迎保育ステーション事業について—

松尾 寛子¹⁾

Cooperation with guardians in a day-care center offering child-nurturing support

Hiroko MATSUO¹⁾

要 約

子どもの登降園時の保護者との会話というインフォーマルな支援が、子育て支援の大切な役割を担っているということはいままでもない。保育士と保護者が直接会って話すことができる機会でもある送迎時に着目し、H県内の乳児を預かる認可民間保育所に対するアンケート調査を実施した。加えて送迎保育ステーション事業を実施しているA市に聞き取り調査を実施した。

アンケート調査によると早朝保育時間帯については、延長保育時間帯も80%以上が子どもの送迎場所を保育室内、保育室前としていた。通常保育時間帯については、保護者から子どもを受け取る場所として80%以上が保育室内や保育室前と回答していた。しかし通常保育時間帯であっても、玄関ホール付近や門の辺りで子どもを受け渡しする保育所が10%以上あった。

保護者と保育者がインフォーマルな子育て支援ができる関係作りをしていかなければならない。

キーワード：子育て支援、送迎場所、保護者との連携、保育所、送迎保育ステーション

SUMMARY

Communication between a guardian and the day-care center is important. This study examined the informal child-nurturing support offered by a day-care center about meeting and sending. A questionnaire survey was administered to the staff of a day-care center in A City. In many day-care centers, the guardians assemble and collect their children from a front room or a child-care room.

All day-care centers should give special importance to interaction with guardians.

1) 教育学部こども教育学科

Key words : child-nurturing support, day-care center about meeting and sending,
cooperation with guardians, day-care center, meeting and sending off child care station

目的

保育所の役割・機能の多様化にともない、早朝・延長保育はもとより、休日保育・病児保育・病後児保育・一時保育など、各自治体や各保育所において様々な子育て支援が実施されている。

子どもを保育するにあたり、保育所での子どもの姿だけではなく、帰宅後の子どもの姿を想像して保育を行うこと、帰宅後から翌朝登園するまでの家庭での姿を保護者から聞いたり、聞くことができなかった部分についてはどのように過ごしてきたのかを想像しながら保育をすることにより、今の子どもの姿が理解できるといえる。子どもの24時間を考え保育するためには、保護者と保育者あるいは保育所側との連携を図ることができなければならない。保育所保育指針には、保育所に入所している子どもの保護者に対する支援として、子どもの送迎時の対応、相談や助言、連絡や通信、会合や行事など様々な機会を活用して行うこと、とある。保育を行う際は、保護者と保育者の双方向でコミュニケーションを必要とし、保育所と保護者が一人の子どもを「共に育てる」という意識を持つ必要がある。

連携方法には様々あるが、本研究では、保育士と保護者が直接会って話すことができる機会でもある送迎時に着目し、誰が子どもを受け取り・お返ししているのか、その人になっている理由についてH県内の乳児を預かる認可民間保育所に対するアンケート調査を実施した。さらにA市の送迎保育ステーション事業に対する聞き取り調査を行った。

子育て家庭におけるサポートの定義付け

子育て家庭におけるサポートについては様々な方法が考えられる。保育所等に申し込みをして可能になる面談等については、保護者も保育所側も面談日時だけではなく面談を受ける人・場所ともに、あ

らたまった形となるため、本研究では「フォーマルな子育て支援」と位置付けることとした。そして、保育所等で行われる子育て支援のための事業を「フォーマルなサポート」とした。

一方で、上述した日時を指定して保護者から相談を受けることも保育所における子育て支援の一つであるが、保護者にとっては保育者と送迎時の短時間に行うコミュニケーションを通して、子育ての悩みを解消できたり、増幅を抑えたりできることもあると考える。保育者にとっては保護者の少しの変化を読み取り、声をかけるきっかけづくりになることもあるため、本研究では送迎時など普段の保護者と保育者とが行う子どものことについての会話や、それ以外の会話について「インフォーマルな子育て支援」とし、金銭の授受がなくとも子どもを預けることができる祖父母や近隣等の存在などを「インフォーマルなサポート」と定義づけることとした。

送迎時のコミュニケーションの重要性について

保育所等における在園児家庭に対する子育て支援も重要な役割の一つであり、フォーマルな子育て支援やフォーマルなサポートのみにとどまらない。保育所保育指針にもあるように、子どもの登降園時の保護者との会話というインフォーマルな子育て支援やインフォーマルなサポートが、子育て支援の大切な役割を担っているということはいうまでもない。連絡帳や連絡ボードなどを活用して、保育所と家庭とで日々の子どもの様子を共有し合うということは、虐待の発見なども含めて非常に有効な手立てであることは周知のとおりである。

したがって、保護者が保育者へ子どもを引き渡すときに行われる連絡や会話や、その日一日あったことを伝える場として、送迎時のコミュニケーションも含めて保育であるととらえるべきである。そのような意味からも送迎時は非常に重要な役割を果たし

ていると考える。

送迎時間を短縮したいという親の強い要望もあるかもしれないが、保育士と保護者がコミュニケーションを取れる環境を適切に確保していかなければならないと考える。

先行研究概観

保護者対応についての研究や、保護者の保育ニーズについての研究については以下の通りである。

住田・山瀬・片桐 (2012)¹⁾ は、保護者の保育ニーズについて、「幼稚園と保育所を比較すると、どちらの保護者も園選びを熟考しているが、選択理由には大きな違いがみられた。幼稚園の場合、『たくさん遊ばせてくれる』(65.5%)『雰囲気が良い』(57.9%)『保育内容が良い』(42.3%)『施設や遊具が充実』(38.5%)の順になっており、園の教育方針や教育内容を吟味して、園選びをする傾向が強いといえる。一方、保育所の場合では、『通勤に便利』(51.2%)『家から近い』(48.8%)『雰囲気が良い』(46.3%)『保育内容が良い』(41.5%)となっており、保育内容も然ることながら、保護者の利便性を重視する傾向が強いといえよう」と述べている。このことより、保育所に子どもを預ける保護者は出勤時間までの間に子どもを保育所に送るため、保護者の利便性を重視しているということがわかる。

成田 (2012)²⁾ によると研修終了後、経験年数0～40年の保育士182名に対して、研修内容に加えて「日頃の保護者対応で困っていること、悩んでいること」を質問している。回答から、経験を重ねてもコミュニケーション力に自信が持てない保育士は若干存在するものの、経験年数を重ねることで自分自身のコミュニケーション力で困るという回答は減少するということが、経験を積むことにより、分かり合い、伝え合うことができるようになると述べている。さらに保育士として子どもやその保護者と関わる中で、保護者の主体性を尊重しながら、保護者の話をじっくりと聴き、保護者の立場に立って支える、いわゆるカウンセリングマインドに通じる能力が身

についていく、と述べている。

このことにより、若い保育士ほど保護者とのコミュニケーションに自信がなく、保護者対応に困っているのではないかということが読み取れる。

奈良 (2011)³⁾ によると、保育士が家庭とのコミュニケーションを図る手段としては、連絡帳・個人面談・家庭訪問・保育参観などを挙げ、保護者がいろいろな行事に参加することと述べている。特に「連絡帳」は一人一人の子どもの様子や育ちを確認しあい、双方向の意見交換ができる。保護者から家での子どもの様子、保育者からは園での様子やその日の出来事、大事な連絡事項などを伝えるものであり、毎日の懸け橋となっている。また、子ども一人一人の理解を深めていくため、信頼関係を築くためにとっても大事なものである。と述べている。

保育者にとっては、毎日の連絡帳記入は人数が多くなればなるほど負担になることと、保育者の文章表現のあり方にも大きく影響されるため、負担に感じる場合もある。しかし、保護者との連携のために必要なものであるということには変わりなく、保護者にとっても子どもの成長の記録として大事なものであるということが理解できる。

これらの先行研究から、保護者と保育者あるいは保育所との連携が必要だということはわかった。連絡帳などを利用することも連携の一つであるということがわかった。しかし、登園降園時の保護者とのコミュニケーションについて特化した研究は未だ無いため、新しい見地ということが出来る。

方法

(アンケート調査)

対象：H県内の乳児を預かる認可民間保育所(604か所)の園長

調査内容：質問紙調査(郵送)、保育所の概要、保護者から子どもを預かる場所、人、その理由・時間など、保護者へ子どもをお返しする場所、人、その理由・時間など

実施時期：2013年8月(アンケート郵送後1か月)

以内に回収を行った。)

(聞き取り調査)

対象：A市役所担当部署市職員

調査内容：聞き取り調査による、送迎保育ステーション事業の概要、利用状況、送迎保育ステーション事業ができた経緯など

実施時期：2014年8月15日（14時～15時30分）

も、研究成果を報告するにあたり、個人が特定できないようにすることなどを明記した。

聞き取り調査については、ボイスレコーダーを使用することを事前に担当者には許可を得て、聞き取った内容については研究成果を報告すること、A市ということを確認してよいかどうかの確認を行い、許可を得た。

倫理的配慮

神戸常盤大学・神戸常盤大学短期大学研究倫理審査委員会にて承認され、アンケート調査用紙の中に

アンケート結果

アンケートについては220園から回答があった。

(回収率 36.4%)

結果については以下の通りである。

表1 保護者と保育士の日々の連携方法

(n=220)

大カテゴリー	中カテゴリー	カテゴリー番号	小カテゴリー	回答数(園)	回答率(%)
早朝保育時間	保護者から子どもを受け取る場所	1	保育室内	123	55.9
		2	保育室前	57	25.9
		3	玄関ホール近辺	25	11.4
		4	門の辺り	6	2.7
		5	その他	3	1.4
	子どもを受け取る場所をそこにしている理由	1	保護者との連携を図るため	153	69.5
		2	防犯のため	82	37.3
		3	保護者と保育士が話し込むのを避けるため	2	1.0
		4	送迎時間短縮のため	41	18.6
		5	朝の準備を保護者に行ってもらうため	48	21.8
		6	その他	53	24.1
	保護者から子どもを受け取る人	1	早朝保育のみ勤務のパート・アルバイト保育士	11	5.0
		2	常勤保育士・パート保育士	195	88.6
		3	主に朝(午前中など)に勤務のパート・アルバイト保育士	2	1.0
		4	その他	5	2.3
	保護者から子どもを受け取る人をその人としている理由	1	保護者との連携を図るため	156	70.9
		2	防犯のため	36	16.4
		3	保護者と保育士が話し込むのを避けるため	1	0.0
		4	送迎時間短縮のため	0	0.0
		5	受け渡し担当を決めているから	24	10.9
6		その他	67	30.5	
通常保育時間	保護者から子どもを受け取る場所	1	保育室内	127	57.7
		2	保育室前	54	24.5
		3	玄関ホール近辺	19	8.6
		4	門の辺り	12	5.5
		5	その他	6	2.7

通常保育時間	保護者から子どもを受け取る場所をそこにしている理由	1	保護者との連携を図るため	180	81.8
		2	防犯のため	69	31.4
		3	保護者と保育士が話し込むのを避けるため	0	0.0
		4	送迎時間短縮のため	42	19.1
		5	受け渡し担当を決めているから	11	5.0
		6	その他	41	18.6
	保護者から子どもを受け取る人は	1	クラス担任	177	80.5
		2	受け渡し担当保育士	19	8.6
		3	その他	18	8.2
	保護者から子どもを受け取る人をその人にしている理由	1	保護者との連携を図るため	185	84.1
		2	防犯のため	57	25.9
		3	保護者と保育士が話し込むのを避けるため	0	0.0
		4	送迎時間短縮のため	25	11.4
		5	受け渡し担当を決めているから	17	7.7
		6	その他	37	16.8
	保護者へ子どもをお渡しする場所	1	保育室内	120	54.5
		2	保育室前	63	28.6
		3	玄関ホール近辺	21	9.5
		4	門の辺り	2	1.0
		5	その他	7	3.2
	子どもをお渡しする場所をそこにしている理由	1	保護者との連携を図るため	180	81.8
		2	防犯のため	88	40.0
		3	保護者と保育士が話し込むのを避けるため	5	2.3
		4	送迎時間短縮のため	41	18.6
5		受け渡し担当を決めているから	10	4.5	
6		その他	27	12.3	
保護者へ子どもをお渡返しする人	1	クラス担任	196	89.1	
	2	受け渡し担当保育士	11	5.0	
	3	その他	5	2.3	
保護者から子どもをお返しする人をその人にしている理由	1	保護者との連携を図るため	192	87.3	
	2	防犯のため	73	33.2	
	3	保護者と保育士が話し込むのを避けるため	1	0.0	
	4	送迎時間短縮のため	16	7.3	
	5	受け渡し担当を決めているから	1	0.0	
	6	その他	0	0.0	
延長保育時間	保護者へ子どもをお渡しする場所	1	保育室内	144	65.5
		2	保育室前	64	29.1
		3	玄関ホール近辺	20	9.1
		4	門の辺り	0	0.0
		5	その他	13	5.9
	子どもをお渡しする場所をそこにしている理由	1	保護者との連携を図るため	153	69.5
		2	防犯のため	109	49.5
		3	保護者と保育士が話し込むのを避けるため	1	0.0
		4	送迎時間短縮のため	39	17.7
		5	受け渡し担当を決めているから	26	11.8
		6	その他	24	10.9
	保護者へ子どもをお渡返しする人	1	延長保育のみ勤務のパート・アルバイト保育士	26	11.8
		2	常勤保育士・パート保育士	172	78.2
		3	その他	13	5.9
	保護者から子どもをお返しする人をその人にしている理由	1	保護者との連携を図るため	155	70.5
		2	防犯のため	83	37.7
		3	保護者と保育士が話し込むのを避けるため	1	0.0
		4	送迎時間短縮のため	14	6.4
		5	受け渡し担当を決めているから	33	15.0
		6	その他	36	16.4

(1) 早朝保育時間・延長保育時間における送迎場所と受け渡し保育者について

早朝保育時間については、保育者の時差出勤により、必ずしも担任保育士が出勤しているとも限らない。保育所によっては、常勤保育士がローテーションを組んで早朝保育時間に数名が出勤したりするところもあれば、早朝保育や延長保育時間帯のみのパート・アルバイト保育士や午前だけの保育士が勤務したりするところもあり、保育士の勤務については保育所ごとに多様である。

子どもの登園時間については、保護者の勤務の状況により個人差があり、早朝保育開始時間から登園する子ども、通常保育時間帯から登園する子ども、通常保育時間開始後しばらくしてから登園する子どもがいる。降園時間については通常保育時間内に降園する子ども、延長保育を利用して降園する子どももあり、日によって登園や降園時間は様々である。

そのため、保護者が担任保育士と会話できる場数が少ないこともあり、担任保育士との会話する時間を持っていないため、当日朝のことについては早朝担当保育士が担任保育士に連絡をすること、延長保育担当保育士は担任より聞き取ったことを保護者に伝えることを忘れてはならない。通常保育時間帯のように担任保育士が保護者の様子を敏感に感じ取ることができないこともあるが、そのような事態を避けるためにも、保育所内での連携が大切になってくる。

アンケート調査によると早朝保育時間帯は180園(81.8%)、延長保育時間帯は208園(94.6%)が子どもの送迎場所を保育室内、保育室前としていた。また、時間を区切って送迎場所を分けているため、複数箇所を送迎場所として挙げている保育所もあった。

保護者と保育者が子どもの育ちを共に喜び合える関係作りのために、保育所あるいは保育士として保護者とのコミュニケーションの重要性を認識し、短時間の間に伝達しなければならない内容を精選することも必要である。保護者との関係構築のために、精選した内容ばかりではなく、子どもの育ちについて保護者とのコミュニケーションを楽しむために、

コミュニケーション力を高める努力もしなければならない。何より保育所として毎日のコミュニケーション場を適切に確保していかなければならないと考える。

(2) 通常保育時間における送迎場所と受け渡し保育者について

登園時には保護者も出勤前など、保育者とゆとりのある会話をする時間を設けることは難しく、保育者は保護者に迎えの時間・人、子どもの健康状態や変化の有無など、必要な連絡事項を聞くことは最低限必要である。

アンケート結果では、保護者から子どもを受け取る場所として181園(82.2%)が保育室内や保育室前と回答していた。しかし、通常保育時間帯であっても、玄関ホール付近や門の辺りで子どもを受け渡しする保育所31園(14.1%)あった。保護者から子どもを受け取る場所をそこにしている理由を、185園(84.1%)が保育所が保護者との連携を図るため、という回答をしているのに対し、保護者へ子どもをお返しする際に「保護者と保育士が話し込むのを避けるため」と回答した保育所は5園(2.3%)あった。

また、早朝・延長保育時間では担任以外の保育士や、受け渡し担当保育士が子どもを受け渡しすることは、時間差勤務の都合上ありうることはあるが、通常保育時間内でも担任以外の保育士や受け渡し担当保育士が子どもを保護者から受け取ったり、お返ししたりする現実も見えてきた。これは、保護者との連携をはかるということより、送迎時間の短縮も一つの要因になっているのではないだろうか。

通常保育時間帯における子どもの登園時に、保護者から子どもを受け取る場所として、玄関ホール近辺と門の辺りが31園(14.1%)、降園時、子どもを保護者へお返しする際には、保育室内、保育室前が80%以上であるのに対し、玄関ホール付近・門の辺りが23園(10.5%)あった。これは担任以外の保育士が受け渡ししているものと考えられ、担任は保育中に保育室を長時間離れることが安全管理上難し

いと考えられるため、担任以外の保育士や受け渡し保育士が子どもを保護者にお返しすると思われる。するとその日一日起こった出来事やトピックスを保護者に伝えることは難しく、保育所は単に子どもを預かる場所、ということにならないかという疑問が起こった。

保護者にとって保育士の一言に一喜一憂することが多く、保育士と保護者との連携については、会話する内容も方法も非常に気を遣うかもしれない。しかし、誠実に子どもとかかわり、保護者にも誠実に対応していると、保護者も保育士に対して信頼を抱くようになるが、反対に保育者に対して不信を持つのもこの会話からという場合もある。

普段の子どもの様子を伝えることや、何気ない会話の中からも信頼関係が生まれ、保護者にとって保育士が身近な子育て相談相手になり、保育士はインフォーマルな子育て支援を知らず知らずのうちにしているということも多い。通常保育時間の子どもの受け渡しが担任以外や受け渡し担当保育士である場合、保護者に伝達すべきことの方法のあり方について疑問が起こった。

まず、受け渡し保育士を決めていることにより、保護者と担任が会話している間の安全管理方法についての問題視しなければならない。保護者と保育者が話し込むことにより、保育室内での事故やけがが

起こってしまうほうがより問題である。しかし、複数クラスを合同で保育室内にて保育をおこない、担任以外の保育士が保育を行うことにより担任が保護者と話す時間が持つなど、保育における工夫もしていかなければならないだろう。

子育てや保育所での保育は人間関係の中で信頼関係が築かれるため、物品を販売するような方法と同様にはいかない。物品販売する際にはドライブスルー方式も採用しているところはあるが、子どもを預ける際には、保護者と保育所は信頼関係を築くことができるようにコミュニケーションを図って「子どもを預けるだけの場所」にならないようにしなければならない。

表2の「連絡方法」として、送迎時に保護者と保育士が直接会話すると回答したのは、208園(94.5%)であった。残りの5.5%については、連絡帳に記載したり、連絡ボードに記載したりするところもあるのではないかと考えられる。また、送迎がバス通園ということも考えられる。特に低年齢・低月齢児を保育する際は、今日起こった出来事を保育者が保護者に対して正確に伝えていく必要があるため、連絡帳に記載するより口頭で伝えたほうがよい出来事などもあり、会話を通して保護者と保育者が連携できる方法を考える必要がある。

表2 保護者と保育士の日々の連絡方法

(n = 220)

大カテゴリー	カテゴリー番号	小カテゴリー	回答数(園)	回答率(%)
子どもや保護者に対する日々の連絡(連携)方法	1	送迎時に保育士と保護者が直接会話する	208	94.5
	2	連絡帳に記載	203	92.3
	3	クラス内の連絡ボード	101	45.9
	4	掲示板	134	60.9
	5	メール	39	17.7
	6	その他	34	15.5
	7	特になし	0	0.0
早朝保育を利用する保護者と子どもから担任への連絡方法(日々の連絡や連携)方法	1	担当保育士が朝に保護者から聞いた内容を担任に直接会話し伝える	179	81.4
	2	担当保育士が朝に保護者から聞いた内容をメモやノートに書き担任に渡す	144	65.5
	3	朝礼等で申し送りをする	34	15.5

早朝保育を利用する保護者と子どもから担任への連絡方法（日々の連絡や連携）方法	4	クラス内の連絡ボードに保護者が記入し、担任が出勤してから確認する	40	18.2
	5	個人連絡ノート（帳面など）に保護者が記載する	145	65.9
	6	保護者が園にメールを送る	8	3.6
	7	特になし	0	0.0
	8	その他	11	5.0
延長保育を利用する保護者と子どもへの担任からの連絡方法	1	担当保育士が担任から聞いたことを迎えに来た保護者に直接話し伝える	204	92.7
	2	担当保育士が担任から聞いたことメモ（担任が書いたメモ）を迎えに来た保護者に渡す	66	30.0
	3	クラス前の連絡ボードに書いていることを保護者が確認する	67	30.5
	4	担任が個人連絡ノート（帳面など）に記載する	168	76.4
	5	園内の掲示板に貼る	63	28.6
	6	担任が保護者の迎えの時間まで待ち直接伝える	125	56.8
	7	保育士に子どもと保護者の自宅に電話させる	85	38.6
	8	メール	6	2.7
	9	特になし	0	0.0
	10	その他	3	1.4
育所で保護者と保育士が相互に記入し連絡しあう連絡ノートはあるか	1	ある	216	98.2
	2	ない	2	1.0
連絡ノートはいつから記入を開始するか	1	入園式の日から	90	40.9
	2	入園式の翌日から	103	46.8
	3	慣らし保育が終了してから	8	3.6
	4	保護者からの記入があっても保育所は記入しない	0	0.0
	5	それ以外	13	5.9
連絡ノートを利用していないのはなぜか	1	保護者とは口頭で連絡を取っているため	5	2.3
	2	連絡ボード等を使用しているため	0	0.0
	3	それ以外	1	0.0
連絡ノートにはどのようなことを記入しているか（記入する欄があるか）（複数回答可）	1	子どもの体調	201	91.4
	2	食事量（哺乳量）	202	91.8
	3	排泄	201	91.4
	4	連絡事項	204	92.7
	5	その他	91	41.4
連絡事項欄にはどのようなことを記入するか（複数回答可）	1	連絡事項	176	80.0
	2	その日の出来事	185	84.1
	3	その他	44	20.0
保護者との連絡ノートをどの程度重要視しているか	1	非常に重要視している	82	37.3
	2	重要視している	128	58.2
	3	どちらでもない	3	1.4
	4	あまり重要視していない	3	1.4
	5	重要視していない	0	0.0
連絡ノートのシステムは必要だと思うか	1	必要	208	94.5
	2	不必要	4	2.0
その理由はなぜか（複数回答可）	1	保護者との連携にとって必要だから	203	92.3
	2	保育士の業務が過密なため	10	4.5
	3	書く時間が無いため（休憩時間等に書いているため）	14	6.4
	4	保育士により書く力量が違い、保護者にうまく伝わらないことがあるため	13	5.9
	5	担任が月一回程度の保護者に渡す保育報告書を作成しているため	1	0.0
	6	別の方法で補っているため	10	4.5

現在在籍する子ども の保護者の中で 対応が難しいと感じ る人はいるか	1	いる	146	66.4
	2	いない	64	29.1

送迎保育ステーション事業について⁴⁾

送迎保育ステーション事業とは、待機児童解消対策の一つとして実施されている事業のことである。駅中や駅近くに送迎保育ステーションという子どもを預かる場所を設け、保護者は登園させる際、子どもを送迎保育ステーションに預け、送迎保育ステーションで預かった子どもを、委託された事業所がバスで市内の指定保育所を周り、子どもが在籍している保育所に子どもを預ける。降園時間になると、子どもを委託された事業所のバスに乗せ、送迎保育ステーションまで送り、保護者が送迎保育ステーションに迎えに来るというシステムである。

A市への聞き取り調査について

「送迎保育ステーション」というキーワードを入力し、上位に挙がった2市について調査を行うため、B市とA市について電話で調査依頼を行った。

B市へ依頼を行ったところ、送迎保育ステーションの利用児が少ないということ、現在様々な見直しを行っているところであり、調査の対象にはならないだろうということを担当者が話された。

A市については、8月15日にA市役所にて市担当者より話を聞くことができた。

A市は路線「E」の乗り入れにより、子育て世帯が多く転入するということを想定した。子育て世帯が多く転入することによって保育施設の拡充も必要になるが、既存の保育施設の活用や待機児童の解消などを踏まえ、送迎保育ステーション事業を展開することとなった。

A市ではある社会福祉法人に送迎保育ステーション事業を委託している。事業費は平成26年度は1億以上とのことである。

送迎保育ステーション事業実施場所については、

在来線2線が乗り入れをしているC駅とD駅にて実施している。

C駅で実施されている送迎保育ステーションは平成19年7月から、D駅で実施されている送迎保育ステーションは平成20年7月から実施している。年度当初からの開設ではなく、7月1日から実施というところについて尋ねてみると、担当者はその理由はわからないとのことであった。

C駅で実施されている送迎保育ステーションは、駅ビル直結であり雨に濡れないアクセスであるのに対し、D駅で実施されている送迎保育ステーションは駅から1分程度歩かなければならない距離であるため、利用者はC駅で実施されている送迎保育ステーションは、平成25年度は延べ39,766名、D駅で実施されている送迎保育ステーションは延べ16,238名で、D駅で実施されている送迎保育ステーションのほうが利用は少ない。

平成19年度（C駅の送迎保育ステーション開設当初）は、C駅で実施されている送迎保育ステーションは延べ3,136名だったことをみると、開設当初の10倍以上の利用がある。D駅で実施されている送迎保育ステーションについても開設当初の平成20年は延べ7,993名あり、開設当初の2倍以上の利用がある。

送迎保育ステーションには、バス1台につき、バス運転手1名、保育士有資格者1名がいるとのことである。C駅で実施されている送迎保育ステーションではバスは5台、D駅で実施されている送迎保育ステーションについてはバス2台を稼働させている。

通常の保育所利用にあたっては、市が利用可否を決定するが、送迎保育ステーションの利用にあたっては、通常の保育所利用申し込みとは別に、利用申し込みは送迎保育ステーションにて面談形式で行うとのことである。送迎保育ステーション利用可否に

については保護者の通勤や送迎の状況等を加味しながら送迎保育ステーションを委託されている事業者が決定するということであった。

A市の送迎保育ステーションでは朝（登園）もしくは夕方（降園）のどちらかだけの利用も可能であり、利用料は1日100円、1か月最大2,000円である。利用料の金額設定については、市内のバス料金を参考にしたとのことである。週に一度（送迎時どちらかで構わない）は保護者が日中保育を受けている保育所に出向いて、保育士と出会うということになっており、送迎保育ステーションに頼っているだけではないということであった。

このように、送迎保育ステーション事業については、待機児童の解消や保護者の送迎の負担など、保護者のニーズについては大きく貢献している。

一方で、送迎保育ステーションを利用する場合は、保育者が保護者の様子を知ったり、保護者から直接子どもの様子を聞き取ることができる登降園時のインフォーマルな子育て支援について、不足を補うコミュニケーション方法はないかなどの模索が必要ではないかを感じる。また、現在は送迎保育ステーションを利用する保護者は、事業者が決めたルール（週に一度、送迎時どちらかで構わないが、保護者が日中保育を受けている保育所に出向いて、保育士と出会うということ）に沿って送迎保育ステーションを利用しているということであるが、ルールに従うことができない保護者が出てきたときの対応なども考えておかなければならないであろう。

まとめ

通常保育時間内において、玄関ホールや門の辺りでの子どもの受け渡しについては、保育室内にいる子どもの保育について手薄になるか、もしくは担任と保護者のコミュニケーションが図りにくい環境にあるのではないかとすることも考えられる。

子どもを保護者にお返りする場面では「保護者と保育士が話し込むのを避けるため」というのも5園あり、保護者対応が保育士業務の負担になっている

ということも十分考えられるが、保護者と保育士が連携を図ることができる環境にあるのかということも考えなくてはならない。

送迎時間の短縮を保育所全体で考えたり、保育士一人一人が必要なことを手短にかつ十分に伝えることができる方法を身につけることも視野に入れていかなければならないということが分かった。

アンケート結果の「連絡方法」から、日中の子どもの保育中の様子を、受け渡し保育士が保護者に伝えることができているのかという疑問も残っている。早朝・延長保育時については、保育士の勤務時間も考えると、必ず保護者と会話できるとも限らないが、通常保育時間帯については、保護者と保育者がインフォーマルな子育て支援ができる貴重な時間であることには違いない。

保育士や保育所は子育てについての専門職であるという認識を持っている保育士や保育所が大半である中、子どもを預かることや保育の内容や方法にのみ保育であるにとらえているのではないかと思える保育所があるのも現実としてある。それはごく一部であるとはいえ、保育所は子育て支援の重要な役割を担っているため、全ての子どもに関わる保育所がその認識を持ってもらいたいと願っている。

今後の課題

子どもの受け渡しが「玄関ホール」「門のあたり」と回答した保育所が、受け取る場所をそこにしている理由について何なのかを分析しなければならない。

「保育に欠ける」子どもが通う保育所は、保護者主体の保育施設ではなく、あくまでも子どもの成長を保護者と保育者が共に喜び合えるような保育施設としてあり続けなければならないと考える。

*本研究は平成25-26年度科学研究費補助金(若手研究B) 課題番号25750013の助成を受けて行った研究成果の一部である

参考文献・引用文献

- 1) 住田正樹・山瀬範子・片桐真弓：保護者の保育ニーズに関する研究，放送大学研究年報，第30号，25-30, 2012.
- 2) 成田朋子：保護者対応に求められる保育者のコミュニケーション力，名古屋柳城短期大学研究紀要，第34号，65-76, 2012。
- 3) 奈良裕美子：幼稚園における子育て支援～幼稚園と家庭との連携のあり方について～，東北女子大学・東北女子短期大学紀要，No. 50, 113-118, 2011.
- 4) A市：送迎保育ステーション事業資料より．A市こども家庭部保育課より入手資料，2014年8月15日現在資料

